

(第 16 回 : 2020 年 11 月)

アラスカ ～The Last Frontier～ (その 2)

前回、アラスカの気候について少し触れましたが、1年の半分以上は夏という中東イスラエルから冬支度もままならない中での転勤でしたので、アンカレッジの寒さは身に染みてこたえました。転勤に際し、現地事情については前任者との手紙による1往復のやりとりで一通りのことは聞いていましたが、詳しいことまでは聞けずじまいでした。現在のように、メールやインターネットなどの便利なツールがあれば、事前に豊富な情報を仕入れることができ、周到な準備もできたのでしようが…

1981～82年当時のアラスカ

当時のアラスカ州は、在留邦人 600 人ほど（外務省統計によれば 2018 年 10 月現在数 728 名）、その多くがアンカレッジに居住していました。前回のコラムでも書いたように、アンカレッジは欧州及びニューヨーク航路の中継地で、JAL 便だけでも 1 日に 10 回以上の離発着がありました。そのため、日本航空アンカレッジ支店が空港及び市内に開設されており、支店スタッフ、ディスパッチャー、整備士、パイロットなどに加えて機内サービスのためのケータリング子会社もあって、JAL 関係者とその家族で総勢 400 人以上が在留しており、在留邦人コミュニティはさながら JAL の城下町のような趣さえありました。また、アラスカ・北太平洋近海の海洋資源が豊富なことを背景に、水産物の水揚げ、加工でも日本向け輸出のための企業が進出していましたし、森林資源の豊富なアラスカ産木材の日本向け輸出でも商社が進出していたと記憶しています。また、西武系のプリンス・ホテルがアンカレッジ郊外のスキー場（アリエスカ・スキーリゾート）を買収して運営を開始したのもこの時期でした（後年に売却）。アンカレッジ以外では、アラスカ州南部のシトカという小さな港町には戦後日本で設立されたアラスカ・パルプの現地パルプ工場が 1950 年代後半から操業しており、十数名の邦人駐在員とその家族が滞在していました（後年、米国の森林伐採規制などもあって撤退、特別清算となりました）。

アンカレッジ市は、東京都の 2 倍以上の面積の土地に人口僅か 20 万人（現在は約 30 万人）という人口密度の疎らな都市で、市街地もわずかな一角だけにダウンタウンとして繁華街が形成され、ダウンタウンから離れた場所に住宅地やショッピングモールが点在する、アメリカの典型的な地方都市でしたが、市内には 10 件以上の日本食レストランがありました。当時、アンカレッジでもすでに日本食ブームの走りのようなところがあり、米国人にも人気がありましたし、欧州線、NY 線航空機の日本人クルーが乗務交替のために 1～2 泊することになるため、在留邦人以外にも常時 100 名以上の日本人がアンカレッジのダウンタウンに滞在しているという状況で、日本食レストランは大いに繁盛していました。蛇足になりますが、日本食レストランでは当時から寿司が人気で、

アラスカを代表する海産物の数の子、子持ち昆布、タラバガニ、サーモン、イクラ、ミル貝などを寿司ネタにした握りは日本人にも大好評で、筆者も堪能しました。アンカレッジを離任した後になって、もう少し食べておけばよかったなどとも思いましたが、人間「食溜め」だけはできません。

最後の開拓地~The Last Frontier~

アラスカ州は、面積が日本の4倍以上、米国50州の中で最も大きく、2位テキサス州の2倍以上と広大です。人口は、当時約40万人と全米でも最も少ない州の一つでした（ちなみに、今回の米国大統領選挙の報道をフォローしていたところ、同州の人口は70万人超との数字が目にとまりましたが、約40年の間で1.7倍以上に増加していることとなります）。元々アラスカは、ユーラシア大陸から渡ってきたエスキモーなどの先住民が暮らす極寒の地に過ぎませんでした。その後、18世紀になってロシア帝国が領有、アザラシなど獣類の毛皮採取等をしていましたが、1800年代半ばに起きたクリミア戦争での莫大な戦費により財政問題を抱えていたロシアが、アメリカに対しアラスカの割譲を提案、1867年に当時の金額にして720万ドルで購入されたものです。購入当時は、「ロシアから巨大な保冷庫を購入した」として無駄な出費だったと米国民から非難を受けたようですが、後に金鉱脈や石油をはじめとする豊富な天然資源が発見されていますので、その点では安い買い物だったといえるでしょう。また、アリューシャン列島のほとんどがアラスカ州という地理的条件から、後のソ連に対する前線基地としての役割を果たすことにもなり、冷戦時代以降は現在に至るまで軍事上の要衝になっているといえます。事実、軍の施設としてエレメンドルフ空軍基地とリチャードソン陸軍基地があって、当時のソ連に睨みを利かせていました（両基地は2010年に空陸の統合基地に改編）。アラスカ州には、ロシアとの割譲交渉に当たった当時の米国务長官ウィリアム・スワード（米国史上最も有能だった国务長官の一人といわれている）にちなんで、スワード半島、スワード町、アンカレッジ市内から郊外に抜けるスワード・ハイウェイなどで彼の名前が残っています。

1959年には、それまで準州という位置づけだったものが州に昇格し、米国49番目の州となり、文字通り米大陸ではThe Last Frontierとなります（50番目の州は島嶼地域のハワイで、同じく1959年に昇格）。元々、先住民が住む村々が点在するだけで人口の少ないアラスカでしたが、ロシアから購入直後の金鉱山の発見により、1800年代後半以降にゴールドラッシュが起き、金鉱を目当てに米国本土（現地ではLower 48 (States)と呼称）から続々と人の流入が起きて開発が進んだようです。また、1960年代に北米最大のプルドーベイ油田が発見されると油田開発、パイプライン建設などで多くの米国人が本土からやってくることになりました。これらの人々は、「一山当てよう」といった意識のいわゆる出稼ぎ的な人が多く、用が済めば米国本土に戻っていくという人もいて、アラスカは人口の流動性が高い州だったと思います。現に、当時日本総領事館で働いていた米国人スタッフは全て米国Lower 48からの移住者で、アラスカ生まれのアラスカ育ちというスタッフは一人もいませんでした。また、総領事館職員の離職率は高く、数か月から2年以内で辞めていくのがほとんどで、職員の募集・面接に忙殺されていたことが悩みの種でした。辞職した職員はアラスカに残る場合とLower 48に戻っていくパターンが半々だったと記憶しています。（現在は、当時に比べて人口の定着性は高まっていると聞きますが…）。

アラスカ先住民のことに少し触れておきます。日本では一般にエスキモーという呼称でなじみの

ある北極圏とその周辺に居住する人々は、人種的にはモンゴロイド系、元々は鯨、セイウチやアザラシ、魚などを移動しながら狩りをする北極海沿岸の民族と、内陸でカリブー（トナカイ）などを狩りする内陸の狩猟民族、海岸と内陸を行き来する民族とがいたといわれています。アラスカ以外にもシベリアの一部、カナダの北極圏、グリーンランドなどに総計約9万人がいるといわれており、現在アラスカには約3万2千人が居住しています（Wikipediaより）。アラスカでは、ゴールドラッシュなどで米国本土から多数の米国人が入って開発が進み、米国本土の文化が流入してくると、定住して狩猟以外で生計を立てるケースも増えてきました。石油などの資源開発のはざまでは、先住民が元来所有していた土地や漁業権などと引き換えに米政府からの金銭的な補償や居住地を提供され、狩猟などで自給自足の生活から開発に関わるような仕事への従事にシフトしていったことでアメリカ社会への同化が進み、元来の生活様式は大きく変化していったといわれています。当時、社会問題となっていたのが先住民のアルコール問題でした。彼らには、元々酒の文化はなく飲酒の習慣はなかったのですが、米国本土から持ち込まれたアルコールの文化により、酒で補償金を使い果たしてしまったり、アルコール依存症の増加、冬場に過度の飲酒で酔っぱらったまま街路で凍死したりといった問題も発生していました。他方、狩猟をやめた彼らの新たな生活の糧として伝統工芸品の製作・販売がありますが、彼らが作る工芸品は珍しくも魅力的な物が多く、中には芸術的な価値を持つような作品もあって観光客にも人気があり、重要な収入源になっていました。筆者もセイウチの牙で作った置物などを買って求めたものです。なお、エスキモーという言葉は、「生肉を食べる者」と誤訳され野蛮だという偏見もあったことなどから、カナダでは差別的だということで使われていません。一方、アラスカではエスキモーという呼称に特段問題はない（先住民自身が差別的とは認識していない）といわれていましたが、それでも、筆者が在勤していた当時の記憶では、新聞、テレビなどのメディアでは「エスキモー」という呼称は「アメリカ・インディアン」と同様ほとんど使われておらず、Native Alaskan または Native American と呼ばれるのが一般的だったと思います。

今回は、アンカレッジ滞在記の最終回です。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モンテリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。